

長谷川 拓也

(東京大学大学院・日本学術振興会特別研究員 DC2)

## 要旨

本研究は、日本語の V-N タイプ二字漢語動名詞 (例: 「飲酒」) の語形成について、「外部表示」(影山 1999) という現象を含めた先行研究の記述 (小林 2004 ほか) を踏襲しつつ、「分散形態論」(Distributed Morphology; Halle and Marantz 1993) の枠組みを用いて説明する。V-N タイプ二字漢語動名詞は、その大多数が二つの一字拘束形態素からなる (Kobayashi et al. 2016: 99) という点で特殊な語構造を持つ。Sugimura (2012) は、V-N タイプ二字漢語動名詞が一つの語根と動詞化辞の併合によって形成されると分析しているが、この分析は、二つの拘束形態素からなるという上記の特殊性を捉えられていない。そこで、本研究は、V-N タイプ二字漢語動名詞が「複合語根」(二つの語根の併合によってできた新たな語根) から派生される (cf. Arad 2003) と主張し、その証左として V-N タイプ二字漢語動名詞の形態的・意味的・音韻的・統語的特殊性に関する経験的な事実を提示する。さらに、本研究は、田川 (2021) の「語彙層 (lexical strata) を越えた異形態」という提案を踏襲し、漢字の音読み・訓読みを異なる統語環境を条件とする語根の異形態であると分析する。

## 1. はじめに

語の仕組みと語形成の解明 (伊藤・杉岡 2002) は、言語学における重要な目標の一つである。日本語において、V-N タイプ二字漢語動名詞 (例: 「飲酒」「投石」) はその大多数が二つの一字拘束形態素で構成される (Kobayashi et al. 2016: 99) という点で特殊な語構造を持つ。本研究は、この V-N タイプ二字漢語動名詞を考察対象とし、「外部表示」(影山 1999) という現象を含めた先行研究の記述 (小林 2004 ほか) を踏襲しながら、「分散形態論」(Distributed Morphology; Halle and Marantz 1993) の枠組みを用いて V-N タイプ二字漢語動名詞の語形成を説明する。本研究の主張は (1) のとおりである。

## (1) 本研究の主張:

- a. V-N タイプ二字漢語動名詞は、「複合語根」(二つの語根の併合によってできた新たな語根) から派生される (cf. Arad 2003)。
- b. 漢字の音読み・訓読み (例: 「飲 (イン／のむ)」) は、異なる統語環境を条件とする語根の異形態として捉え直すことができる (cf. 田川 2021)。

本稿の構成は以下のとおりである。まず、2 節で、関連する記述的研究・理論的研究を概観する。次に、3 節で、V-N タイプ二字漢語動名詞に対する本研究の分析と、その分析の証左となる経験的な事実を提示する。4 節では、「外部表示」(影山 1999) という V-N タイプ二字漢語動名詞に見られる現象を導入し、V-N タイプ二字漢語動名詞と日本語の「動詞由来複合語」(deverbal compound; 伊藤・杉岡 2002; 長谷川・大関 2020 ほか) の比較を通じて外部表示を分析する。最後に、5 節で結論と今後の課題・発展を述べる。

## 2. 先行研究

## 2.1 記述的研究

小林 (2004) は、現代日本語の漢語動名詞について包括的な記述を行った。本研究は、小林 (2004) による二字漢語動名詞の分類のうち、「V-N タイプ二字漢語動名詞」を考察対象とする。なお、小林 (2004) はこのタイプの漢語動名詞を「VN-N タイプ二字漢語動名詞」と呼んでいるが、第一要素の「VN」という表記は影山 (1993) の「動名詞 (VN)」の表記と同一で区別が付きにくいいため、本研究では一貫して「V-N タイプ二字漢語動名詞」という名称を用いる。

V-N タイプ二字漢語動名詞には、「外部表示」(影山 1999) という現象が見られる。外部表示については、日本語の動詞由来複合語 (伊藤・杉岡 2002 ほか) との比較も含めて、4 節で導入・分析を行う。

\* 草稿の段階で大変貴重なコメントをくださった浅田裕子氏、伊藤たかね氏、大関洋平氏に感謝申し上げます。本研究は、JSPS 科研費 JP21J11696 の助成を受けている。

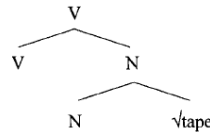
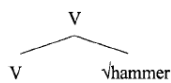
## 2.2 理論的研究

語形成には規則的な側面と不規則的な側面があり（伊藤・杉岡 2002）、従来は、この二面性は統語とレキシコンという部門の違いに還元されると考えられていた。それに対して、すべての語形成を統語部門で扱う分散形態論では、この二面性は、語根を基盤とする（root-based）語形成と語を基盤とする（word-based）語形成という対立に還元されるという提案がある（Arad 2003 ほか）。語根の意味・音韻は、語根に範疇化辞が併合し、フェイズ（Chomsky 2000）が形成された段階で決定される。この段階では、不規則的な意味・音韻が現れる可能性がある。一方で、範疇化された語を基盤としてさらに語形成を行う場合は、その語の意味・音韻が引き継がれるため、規則的な意味・音韻だけが現れる。

Arad (2003) は、英語の「名詞転換動詞」(denominal verb) において上記の対立が存在すると主張した。たとえば、*hammer/tape* に関する経験的な事実として、前者は (2a) に示すように、実際の動作に用いるのはハンマー以外でもよいのに対し、後者は (2b) に示すように、実際の動作にテープ自体を用いなければならない (Kiparsky 1997 : 489)。この差異は、(3) のように、*hammer* が語根派生である一方、*tape* が名詞派生であることに起因する (Arad 2003 : 757)。名詞や動詞の基となる語根は、モノの形や性質などに関する核となる意味 (core meaning) を持つが、具体的な存在物 (entity) を表すわけではない。たとえば、語根  $\sqrt{\text{hammer}}$  は「平らな面がある」「固い」などの形や性質を表すが、ハンマーそのものは表さない。したがって、語根から直接派生された *hammer* は、実際の動作にハンマー以外を用いてもよい。一方で、名詞から派生された *tape* は、名詞になった段階でテープそのものを表すことが決まるため、実際の動作にテープ自体を用いる必要がある。

- (2) a. He hammered the desk with his shoe.  
 b. #She taped the picture to the wall with pushpins. (Kiparsky 1997 : 488, 489)

- (3) a. *hammer* (Arad 2003 : 757)      b. *tape* (Arad 2003 : 757)

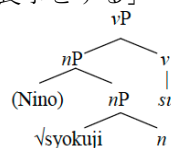
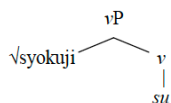


英語の名詞転換動詞の音韻に関しては、以下の対立が挙げられる (Arad 2003 : 759, 760)。(4a) の例は名詞と動詞でアクセントの位置が異なるのに対し、(4b) の例は同じである。この事実は、(4a) の例は名詞と動詞が同じ語根から別個に派生されるため、両者でアクセントが異なるのに対し、(4b) の例は名詞から動詞が派生されることによって名詞のアクセントが保持されるため、両者でアクセントが同じになると分析できる。

- (4) a. *récord*<sub>N</sub>/*recór*<sub>v</sub>*d*, *súbj*<sub>N</sub>/*subjé*<sub>v</sub>*ct*, *óbj*<sub>N</sub>/*objé*<sub>v</sub>*ct*  
 b. *dísciplin*<sub>N, v</sub>, *cóntact*<sub>N, v</sub>, *dó*<sub>N</sub>*cument*<sub>v</sub> (Arad 2003 : 759, 760)

Sugimura (2012) は、Arad (2003) を踏襲し、日本語の「軽動詞構文」(light verb construction) において、語根を基盤とする語形成と語を基盤とする語形成の対立があると主張した。具体的には、日本語の二字漢語動名詞 (例：「食事」) について、名詞が「する」に編入される形式 (例：「食事する」) は (5a) に示すように語根派生であるのに対し、名詞が「する」に編入されない形式 (例：「食事をする」) は (5b) <sup>1</sup> に示すように名詞派生であると分析している (Sugimura 2012 : 293)。この分析によって、数量詞遊離・アクセントパターンに関する両形式の差異と、非対格動詞の派生を説明できると主張している。

- (5) a. 「食事する」 (Sugimura 2012 : 293)      b. 「食事をする」 (Sugimura 2012 : 293)



<sup>1</sup> (5b) の *Nino* は外項であり、名詞化辞によって導入されている。

Sugimura (2012) は、V-N タイプ二字漢語動名詞（例：「読書」）も同様に分析している。しかし、一つの語根（例：√dokusyo）と動詞化辞の併合によって形成されるという分析は、V-N タイプ二字漢語動名詞が二つの拘束形態素からなるという特殊性を捉えられていない。そこで、本研究は、V-N タイプ二字漢語動名詞が二つの語根の併合によってできた新たな語根から派生されると分析することで、この問題の解決を目指す。

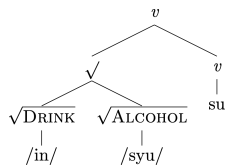
さらに、最近の理論的研究として、田川（2021）は和語・漢語・外来語の語基に付加される接頭辞（例：「大（おお／ダイ）」；「大男」「大企業」「大ヒント」）を「語彙層（lexical strata）を越えた異形態」として捉える分析を提案した。本研究は、田川（2021）の提案を踏襲し、漢字の音読み・訓読みを異なる統語環境を条件とする語根の異形態として捉える分析を提案する。

### 3. 本研究の分析とその証左

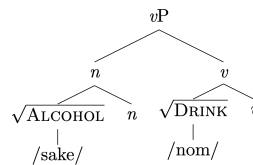
#### 3.1 本研究の分析

本研究は、V-N タイプ二字漢語動名詞が（6a）のような構造を持つと主張する。さらに、語根√DRINK と語根√ALCOHOL の語彙挿入規則として（7）の規則を提案する。

(6) a. 「飲酒する」



b. 「酒を飲む」



(7) 語根√DRINK の語彙挿入規則：

a. √DRINK ↔ /in/ / \_\_ + √ROOT

b. √DRINK ↔ /nom/ <elsewhere>

語根√ALCOHOL の語彙挿入規則：

a. √ALCOHOL ↔ /syu/ / \_\_ + √ROOT

b. √ALCOHOL ↔ /sake/ <elsewhere>

「飲酒する」と「酒を飲む」は一見同じ事象を表しているように見えるが、両者の統語構造は異なる。「飲酒する」は（6a）のように、二つの語根が併合して新たな語根が形成された後、動詞化辞が併合されて形成される。それに対して、「酒を飲む」は（6b）のように、まず二つの語根が範疇化され、その後範疇化された語同士が併合して形成される。語根の音韻的具現形については、「複合語根を形成する」という指定された統語環境では音読みが具現化され（7a）、それ以外の統語環境では訓読みが具現化される（7b）。（7）の規則は、特定の語根にだけ当てはまるのではなく、漢字の音読み・訓読みの区別一般に対して想定されると考える。この分析は、語根を基盤とする語形成と語を基盤とする語形成の対立（Arad 2003）の新たな事例である。

#### 3.2 本研究の分析の証左

本節では、3.1 節で主張した V-N タイプ二字漢語動名詞に対する分析（6a）の証左として、V-N タイプ二字漢語動名詞の形態的・意味的・音韻的特殊性に関する経験的な事実を五つ提示する。

まず、形態的特殊性に関して、V-N タイプ二字漢語動名詞は二つの一字拘束形態素からなるものが圧倒的に多い（Kobayashi et al. 2016 : 99）という経験的な事実がある。拘束形態素は、分散形態論の枠組みにおいてそれ単独では自立できない語根として捉え直されるため、この事実は、V-N タイプ二字漢語動名詞が二つの語根からなるとする本研究の分析を支持している。

(8) 証左 1：二つの一字拘束形態素の組み合わせ

V-N タイプ二字漢語動名詞は、その大多数が二つの一字拘束形態素から構成される（Kobayashi et al. 2016 : 99）。

次に、意味的特殊性に関して、（9）のような例を指摘する。（9a, b）の「出家」「脱帽」には、それぞれ「僧になって修行する」「相手に敬意を示す」という、「家を出る」「帽子を脱ぐ」にはないイディオム的な

意味がある。この事実は、複合語根に動詞化辞が併合した段階でフェイズが形成され、その複合語根に対して意味解釈が適用されることによって特殊な意味が現れると予測する本研究の分析を支持している。

- (9) 証左 2: イディオム的な意味  
a. 「出家 (する)」 vs. 「家を出る」  
b. 「脱帽 (する)」 vs. 「帽子を脱ぐ」

音韻的特殊性に関しては、まず、(10) のような例が挙げられる。(10) に示した V-N タイプ二字漢語動名詞を構成する二つの漢字の音読みは、それ単独では現れず、複合語になってはじめて現れるという点で音韻的に特殊である。この事実は、「複合語根を形成する」という指定された統語的条件の下で、音読みという音韻的に特殊な音形が具現化されるという、語彙挿入規則に示した分析 (7a) を支持している。

- (10) 証左 3: 漢字の音読み  
飲酒、止血、乗車、登校、出家、入学、退団、…

また、二字漢語は、前部要素の末尾が「ツ」「チ」(「一」「吉」など) で、後部要素の頭子音が無声阻害音であるときに促音化が生起する(高山 2010: 22)。V-N タイプ二字漢語動名詞も同様に促音化が見られる例がある。この事実は、一つ目の語根から二つ目の語根の音韻に関する情報が見えているということを示唆する。したがって、この事実は、二つの語根が併合して複合語根を形成することによって、両語根の緊密性が高くなると考える本研究の分析を支持している。

- (11) 証左 4: 促音化  
a. 「出」: 出店、出品、出港、…  
b. 「発」: 発券、発車、発砲、…  
c. 「脱」: 脱会、脱色、脱水、…

さらに、V-N タイプ二字漢語動名詞は「平板型」アクセントのものが大多数であるという経験的な事実(12)も、本研究の分析を支持する。本研究の分析は、複合語根に動詞化辞が併合した段階でフェイズが形成されるため、複合語根全体に対してアクセントが付与されることを予測する。二つの語根が複合語根を形成することによって、両語根の緊密性が高くなり、より一語としての性質が強くなるため、形態素境界が見えなくなるようなアクセント、つまり、「平板型」アクセントになる(cf. 長谷川・大関 2020)と予測され、実際に、(12)に示すように大多数が「平板型」アクセントであることが観察される。

- (12) 証左 5: 「平板型」アクセント  
飲酒、投石、乗車、止血、出店、発砲、脱水、…

#### 4. 「外部表示」の分析

4節では、V-N タイプ二字漢語動名詞に見られる「外部表示」(影山 1999) という現象が本研究の分析を支持する統語的な証左となることを、日本語の動詞由来複合語(伊藤・杉岡 2002; 長谷川・大関 2020 ほか)との比較を通じて議論する。

「外部表示」(影山 1980; 影山 1999; 小林 2004; 仁田 1980; 島村 1985; 張 1992 ほか) は V-N タイプ二字漢語動名詞に見られる統語的な現象であり、(13) に示すように、「動詞の中に意味的に含まれている要素が外部に表現される」(影山 1999: 90) 現象である。以下、外部表示された項には下線を引く。

- (13) 太郎は大量の蒸留酒を飲酒した。

小林 (2004 : 96) は、(13) のような例において、語内の名詞と外部表示された項の間に「包摂関係」が観察されると指摘している。(13) では、「酒」が「大量の蒸留酒」の上位範疇として機能する、つまり、前者が後者を包摂するという意味的關係が成立している。<sup>2</sup>

日本語の動詞由来複合語のうち、内項を語内に含むタイプ (例 : 「魚釣り」) は、複合語内に内項を取り込んでいるという点で V-N タイプ二字漢語動名詞と類似している。そこで、以下では、内項を含む動詞由来複合語が外部表示に関してどのようにふるまうのかを観察する。経験的な事実としては、(14) に示すように、内項を含む動詞由来複合語は外部表示が不可能である。

(14) ?\*太郎はマグロを魚釣りをした。

内項を含む動詞由来複合語は「する」が後続する際に必ずヲ格を伴う (伊藤・杉岡 2002 : 112) ことを考慮すると、(14) は単に二重ヲ格制約の違反によって非文となっている可能性がある。そこで、以下では、(14) が二重ヲ格制約を回避したとしても容認されないということ为例証する。

二重ヲ格制約を回避する方法は、たとえば、とりたてて詞「も」の使用 (15) ・かき混ぜ操作 (16) ・分裂文化 (17) などがある (平岩 2006 : 290-293)。内項を含む動詞由来複合語に関しては、いずれの場合 (15b, 16b, 17b) も、二重ヲ格制約が回避されているにも拘らず容認されない。

(15) a. 太郎は大量の蒸留酒も飲酒をした。  
b. ?\*太郎はマグロも魚釣りをした。

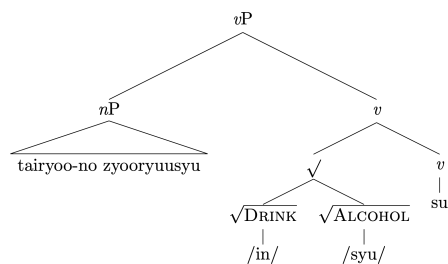
(16) a. 大量の蒸留酒を太郎は飲酒をした。  
b. ?\*マグロを太郎は魚釣りをした。

(17) a. 太郎が飲酒をしたのは、大量の蒸留酒 (を) だ。  
b. ?\*太郎が魚釣りをしたのは、マグロ (を) だ。

以上の事実より、(14) は二重ヲ格制約の違反によってではなく、外部表示によって非文となっていると言える。つまり、内項を含む動詞由来複合語は外部表示が不可能であると結論付けられる。

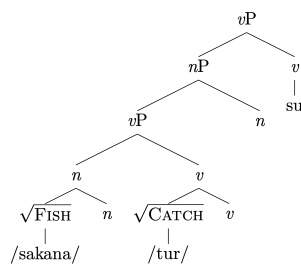
本研究は、外部表示の可否に関する上記の差異が、V-N タイプ二字漢語動名詞と内項を含む動詞由来複合語の統語構造の差異に還元されると主張する。外部表示をした形式の V-N タイプ二字漢語動名詞の統語構造と、内項を含む動詞由来複合語の統語構造 (cf. 長谷川・大関 2020 ; 一部修正) はそれぞれ (18a, b) である。

(18) a. 「大量の蒸留酒を飲酒する」



b. 「魚釣り\* (を) する」

(cf. 長谷川・大関 2020 ; 一部修正)

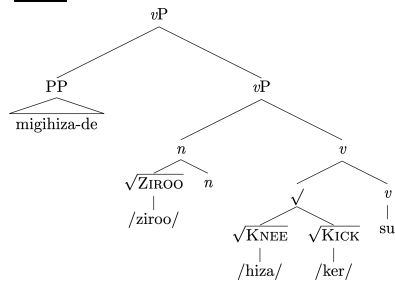


<sup>2</sup> 小林 (2004 : 102) は、もう一種類の外部表示として、(i) のような「所属関係」の例を指摘している。(i) では、「封」が「花子の手紙」の一部である、つまり、前者が後者に所属しているという意味的關係が成立している。「所属関係」タイプについては、5 節で述べるように、「包摂関係」タイプと同様に分析できるかどうかはまだ明らかでないため、今後の課題とする。

(i) 太郎が花子の手紙を開封した。(小林 2004 : 102)

両構造には、統語的・意味的に以下のような差異がある。まず、統語的には、V-N タイプ二字漢語動名詞 (18a) では、先に複合語根が形成され、その後で内項を導入する動詞化辞が併合されるのに対し、内項を含む動詞由来複合語 (18b) では、語根が動詞化され、できた動詞が内項をとるという点で異なる。次に、意味的には、V-N タイプ二字漢語動名詞 (18a) では、語根 $\sqrt{\text{ALCOHOL}}$ が酒そのものを表さないため、外部表示をすることによって、何が実際の動作に関わるのかを具体的に決定するのに対し、内項を含む動詞由来複合語 (18b) では、語根 $\sqrt{\text{FISH}}$ が名詞化された段階で「魚」という具体的な存在物を表すようになるため、外部表示が不可能になっているという差異がある。もし、この分析が正しければ、「外部表示」という現象は、V-N タイプ二字漢語動名詞が複合語根から派生されるという本研究の主張を裏付ける統語的な証左であると言える。以上の分析の予測として、内項を外側で認可する動詞由来複合語は V-N タイプ二字漢語動名詞と同様に複合語根派生 (例：「膝蹴り」；長谷川・大関 2020) であることから、外部表示が可能であると予測される。実際に、(19) に示すように外部表示が可能であることが観察される。

(19) 「右膝で次郎に膝蹴りする」 (cf. 長谷川・大関 2020；一部修正)



## 5. 結論と今後の課題・発展

本研究は、V-N タイプ二字漢語動名詞が複合語根から派生されると主張し、その分析の証左として、V-N タイプ二字漢語動名詞の形態的・意味的・音韻的・統語的特殊性に関する経験的な事実を提示した。また、本研究は、漢字の音読み・訓読みを異なる統語環境を条件とする語根の異形態として捉える分析を提案した。

理論的には、まず、本研究の分散形態論を用いた分析は、V-N タイプ二字漢語動名詞の形態的・意味的・音韻的・統語的特殊性を統一的に説明している。また、もし本研究の分析が正しければ、漢字の音読み・訓読みは異なる統語環境を条件とする語根の異形態として捉え直されることになる (cf. 田川 2021)。さらに、本研究の分析は語根を基盤とする語形成と語を基盤とする語形成の対立 (Arad 2003) の新たな事例である。

今後の課題としては、まず、二種類の外部表示について以下の非対称性が見られる。「包摂関係」タイプ (20) は、4 節で述べたように、V-N タイプ二字漢語動名詞は容認される (20a) 一方で、日本語の動詞由来複合語は容認されない (20b)。それに対して、「所属関係」タイプ (21) は、V-N タイプ二字漢語動名詞 (21a) も日本語の動詞由来複合語 (21b) も容認される。今後は、この非対称性を説明するにあたって、まず「所属関係」タイプが「包摂関係」タイプと同様に分析できるのかどうかについて検討する。

- (20) a. 太郎は大量の蒸留酒を飲酒した。  
b. ?\*太郎はマグロを魚釣りをした。

- (21) a. 太郎は手紙を開封した。  
b. 太郎は商品を値上げした。

また、内項を含む動詞由来複合語の外部表示について、場所項を含むタイプ (例：「墓参り」) は、目的語を含むタイプ (例：「魚釣り」) と同様、(22) に示すように外部表示が不可能である。しかし、なぜ目的語を含むタイプよりも容認性が上がるのか、および、容認性に段階がある (22a-c) のはなぜなのかについてはまだ解明できていないため、今後の課題とする。

- (22) a. ??太郎は祖父の墓に墓参りをした。 (cf. <sup>ok</sup>太郎は祖父の墓参りをした。)  
b. ?太郎は富士山に山登りをした。  
c. ?太郎は浅草寺に寺参りをした。

さらに、内項を外側で認可する動詞由来複合語（例：「膝蹴り」）について、これは4節で言及したように複合語根派生である。本研究が提案した語彙挿入規則は、「複合語根を形成する」ときに音読みが具現化されると規定しているが、内項を外側で認可する動詞由来複合語においては訓読みが現れている。この問題は、本研究が提案した語彙挿入規則の修正が必要であることを示唆している。今後は、「複合語根を形成する」ときに音読み（例：「飲酒」）と訓読み（例：「膝蹴り」）のどちらが具現化するのかを決める方法を検討する。

加えて、他のタイプの二字漢語動名詞についても検討が必要である。3.2節で、V-Nタイプ二字漢語動名詞はその大多数が「平板型」アクセントであると述べたが、並列関係を表す二字漢語動名詞（例：「売買」「貸借」）は「起伏型」アクセントである（浅田裕子（p.c.））という点で興味深い。今後は、和語の複合語（例：「売り買い」「貸し借り」）も視野に入れつつ、このタイプの二字漢語動名詞の分析を検討する。

今後の発展としては、まず、日本語のN-N複合語について、「平板型」アクセントで連濁があるタイプ（例：「里子」）と「起伏型」アクセントで連濁がないタイプ（例：「親子」）の二種類があるが、本研究が踏襲した、語根を基盤とする語形成と語を基盤とする語形成の対立を基に分析できる可能性がある。また、日本語の複合動詞（Oseki 2020）や日本手話の複合語（Asada et al. to appear）についても、当該の対立が見られるという提案があるため、当該の対立を基にした分析がさらに多くの言語現象に対して応用される見通しがある。

### 参考文献

- Arad, Maya (2003) Locality constraints on the interpretation of roots: the case of Hebrew denominal verbs. *Natural Language & Linguistic Theory* 21, 737–778.
- Asada, Yuko, Yukiko Nomi, and Kyoko Shimojima (to appear) Compounds in Japanese Sign Language: Associate Professor teaches twice. *Japanese/Korean Linguistics*.
- Chomsky, Noam (2000) Derivation by phase. In *Ken Hale: a life in language*, Michael Kenstowicz (ed.), 1–52. Cambridge, MA: MIT Press.
- Halle, Morris and Alec Marantz (1993) Distributed Morphology and the pieces of inflection. In *The view from building 20*, Ken Hale and Samuel Keyser (eds.), 111–176. Cambridge, MA: MIT Press.
- 長谷川拓也・大関洋平 (2020) 「分散形態論と日本語の動詞由来複合語」日本言語学会第161回大会口頭発表.
- 平岩健 (2006) 「二重対格制約と格」三原健一・平岩健『新日本語の統語構造』281–306. 東京：松柏社.
- 伊藤たかね・杉岡洋子 (2002) 『語の仕組みと語形成』東京：研究社.
- 影山太郎 (1980) 『日英比較 語彙の構造』松柏社.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』東京：ひつじ書房.
- 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』東京：くろしお出版.
- Kiparsky, Paul (1997) Remarks on denominal verbs. In *Complex predicates*, Alex Alsina, Joan Bresnan, and Peter Sells (eds.), 473–499. Stanford, CA: CSLI Publications.
- 小林英樹 (2004) 『現代日本語の漢語動名詞の研究』東京：ひつじ書房.
- Kobayashi, Hideki, Kiyo Yamashita, and Taro Kageyama (2016) Sino-Japanese words. In *Handbook of Japanese lexicon and word formation*, Taro Kageyama and Hideki Kishimoto (eds.), 93–131. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- 仁田義雄 (1980) 『語彙論的統語論』明治書院.
- Oseki, Yohei (2020) Compound verbs in transitivity harmony and alternation. Paper presented at Morphology & Lexicon Forum (MLF) 2020.
- 島村礼子 (1985) 「複合語と派生語——漢語系複合動詞を中心に——」『津田塾大学紀要』17, 289–301.
- Sugimura, Mina (2012) Root vs. *n*: a study of Japanese light verb construction and its implications for nominal architecture. *Proceedings of ConSOLE* 17, 289–298.
- 田川拓海 (2021) 「分散形態論と語彙層を越えた異形態としての接辞」岡部玲子・八島純・窪田悠介・磯野達也 (編) 『言語研究の楽しさと楽しみ 伊藤たかね先生退職記念論文集』33–43. 東京：開拓社.
- 高山知明 (2010) 「音韻交替の二類と漢語の連濁」大島弘子・中島晶子・ブラン・ラウル (編) 『漢語の言語学』19–37. 東京：くろしお出版.
- 張麗華 (1992) 「『VN』漢語動詞の統語機能」『日本学報』11, 155–170.